



大人が絵本を 第42回 終わりはどこ？



司書・読書アドバイザー 安藤 宣子*

小児歯科医師 濱野 良彦**

* 絵本と図鑑の親子ライブラリー BibliOキッズ(福岡市)
** 医療法人元気が湧く 理事ファウンダー

俯瞰しつつ細部を洗い出すこと、これ大事

日本の文化を象徴する伝統スポーツといえば相撲ですが、過去から今日まで、その内部で頻発する事件が止まないことは、日本人として心苦しく、悲しいことです。昨年起きた現役力士の暴行事件は、メディアによって連日エスカレートしていく報道が聴こえてくるたび、疑問符が重なりました。事件は被害力士の番付陥落と、その師匠の相撲協会理事解任という形で、年明け早々に幕が引かれました。マスメディア報道は盛んなのですが、事の内部真相が全く見えてこないこの事件は、角界がいまだ封建的な縦社会で、隠ぺい体質にあるということだけ、はっきりと確認できたのでした。さらには、その後も次から次へと不祥事が発覚される事態に、呆れかえるばかりです。

絵本の内部構造に視点を向け、定義づけられていない理論研究に着手したのは、造形美術論を専門とする中川素子氏です。「本の内容としての構造論は、それだけに留まらず、空間性や物質性をもった本のあり方と必然的にからみあっていることが、小説、児童文学などとの構造論の違い」との仮説を立て、先行文献調査によって「空間性、物質性を意識しながら、絵本の構造を全体的に俯瞰し分析している論は、イギリスやアメリカにもない」と報告しています¹⁾。そして、自ら実際に多くの絵本例の構造分析をして、新たに用語を探り出し、それぞれの構造のヴァリエーションを洗い出して用語を決定していくという作業を成したのです。

細かい分析を続けた結果、提起した絵本の構造体系は、線構造、展開構造、円環構造、点の並列構造、対位法構造、ポリフォニー構造の7つの表現構造

で、それまで絵本論になかった全く新しい視覚表現の視点を理論づけたのです¹⁾。絵本と、その研究において歴史の古いイギリスでもアメリカでもなく、日本からの発信は、日本が絵本大国であることを世界に知らしめた誇り高いことなのです。

7つの表現構造のうち、読み手の視覚と想像力にしかけてくる「円環構造絵本」を読み解いていきます。

なんとまあ！終わりのない絵本

鮮やかな緑色のりんごがぶら下がっている『りんごとちょう』の表紙を開いてみましょう。見返して、さらに大きくなった緑のりんごのページをもう一枚めくった瞬間、鮮度の高い真っ赤に熟れたりんごが目飛び込んできます。それが扉で、ここまでの3画面はりんごの外観を映していますが、その扉をめ



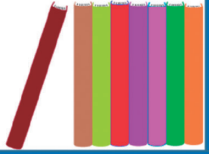
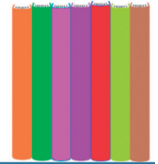
『りんごとちょう』
イエラ・マリ、エンゾ・マリ 作
(ほるぷ出版)

くると画面は内観へ移ります。実の部分では、一匹の虫が生まれているのです。やがてりんごから出てきた虫は、雪降る冬から、新緑の春へと季節が移り変わる頃、さなぎから蝶となり飛んで行くと、りんごの花が咲く季節に再び飛んで来て、りんごの胚珠に卵を産み落とします。そして、花が散ったあとに実った小さな緑のりんごは大きくなって…、表紙のりんごとなって新しい物語が始まるのです。

「円環構造」とは、終わりのないエンドレスの物語なのです。「時空間を前に向いて進み、再び起点に戻って、その起点からまた最初と同じ道をたどる絵

手にするときは！

円環をまわり続ける絵本



企画 濱野 良彦
構成 木須 信生 ※※※

※※※ 絵本と図鑑の親子ライブラリー ビブリオキッズ(福岡市)



本」¹⁾と定義づけられているように、季節の移り変わりとともに、りんごの木と、りんご、そして蝶の生命の循環が永遠に続く神秘的物語なのです。この物語が壮大なスケールに仕上がっているのは、言葉による説明が一切ない演出によるもので、ページをめくる読み手の行為によって変わっていく四季の映像は、自然賛歌といえるでしょう。

螺旋のように円を形作り、繰り返される「円環構造」そのものについて中川氏は、「生と死と再生、生命の輪廻などをイメージさせる」と解き、絵本のあり方そのものだけでなく遺伝子研究にも着眼して、「生命や世界を循環する円環運動体」と捉えているのです¹⁾。



終わりになきひとつの円の物語、その原点とは

生命の「円環運動体」そのものと言える『りんごとちょう』の作者は、イタリアのグラフィック・デザイナーであるイエラ・マリ氏とエンツォ・マリ氏の共作で、「テーマだけでなく、リング綴じなど絵本のあり方そのものでも円環構造を表現している」絵本作家であると中川氏は絶賛しています¹⁾。作品は他にも、鶏が産んだ卵をあたためると、ヒヨコが生まれ、そのヒヨコが大きくなって卵を産んで…との円環運動体を描いた『にわとりとたまご』があります。

ミラノで生まれたイエラ・マリ氏は、食料事情の厳しい第二次世界大戦時に少女時代を過ごしたため、植物や家畜などの自然を食料として観察し、風景には興味をもたなかったようです。卵を産む鶏といった自然観察が好きだった経験が、「終わりになきひとつの円という自然のとらえ方の原点ではないか」と、中川氏は推察しています²⁾。ブレラ・アカデミーでエンツォ・マリ氏と出会い結婚して、絵本

の共作者ともなりますが、15年一緒に暮らした後に離婚し、共作者としても解散してしまいました。

イエラ・マリ単作では、『あかいふうせん』のタイトルどおり、緑の背景の画面いっぱいに赤い風船が膨らんだ表紙が、シンプルだけどインパクトがあって、どこか『りんごとちょう』に通じるようなところのある文字のない絵本があります。赤い風船が、りんご、蝶、花と形を変えていき、最終画面で上から見た傘が円形になって起点に戻る構造には驚きです。



ディティールのクローズアップ

「生命や世界を循環」とのテーマ性をもっとも力強いのは、『木のうた』です。全ページ同じ構図で映された一本の木を主人公に、雪が積もった冬の場面から始まり、春、夏、秋と季節はめぐって、また雪の降り積もる冬となります。最初の画面では、木と雪以外の生きものは登場しませんが、ページをめくると、雪の下は断面図になっていて、植物の種や、ヤマネが冬眠している姿が描かれ、春になると植物が芽吹いて、ヤマネや鳥たちが活動を始める一連の画面より、みなぎった「生命力」を感じることができるのです。自然と生命の循環を美しい色遣いで表現した美術作品です。



『木のうた』
イエラ・マリ 作
(ほるぷ出版)



イエラ・マリ氏の描く色と形は、「画面の構成力のためだけでなく、見る者に自然のしくみと本質を感知させ自然と一体化させる力をもっている」と中川氏は分析し、この『木のうた』について、「知識として



自然を描いているのではなく、子どもたちに自分たちも自然のふところに抱かれ自然のリズムの中で生きていることを伝えているが、そのリズムを生み出しているのが、円環構造なのである」と解説しています²⁾。イエラ・マリ氏の表現力もさることながら、直接会ったことのない画家の絵と生い立ちをもって俯瞰し、そして細部を読み取って分析する中川氏の物事を見抜く力にも感嘆してしまいます。「ディテール(細部)のクローズアップ」の観点で、イエラ・マリ氏と中川素子氏に共通する分析力がみられます。

構造に気づくと増す深み、広がる世界

円環構造は、イエラ・マリ氏だけの技法ではありませんので、日本人作家の作品も鑑賞しましょう。私たちビブリオキッズの故郷である福岡県で生まれた絵本作家・タイガー立石氏の『とらのゆめ』は、タイトルどおり、トラのとらきちが見る夢の物語で、奇妙かつ独特な世界観に、読者は不思議な浮遊感を覚えることでしょう。「とらきちは全身、緑色。夢の世界の大地も緑」という紹介だけで、強烈な印象を持ちます。

「ぐうぐうぐう」、はじめの扉で、小さな四角い透明な箱の中に丸まって眠っているとらきちは、次のページで箱から抜け出て、ではなく、箱も身体の一部になっているので変身して、「夢の世界へ出て行きます」³⁾。池の水面に映った自分の尻尾をくわえたり、くると丸まって赤いダルマに変身したりと、摩訶不思議な世界を浮遊した最終画面からひとつ前の画面で、身体をまた丸めて、「ぐうぐうぐうとらきちはひとりで眠ります」³⁾。そして最終画面は、絵も言葉も扉の第一画面と全く同じで、螺旋構造なのです。

『ねずみくんのチョコッキ』の作者である上野紀子氏のデビュー作『ぞうのボタン』(富山房)もまた、円環構造です。1973年にアメリカで『Elephant Buttons』を出版し、認められて2年後に日本での出版がか

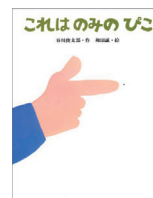
なった異色の経歴をもつ貴重な作品です⁴⁾。

ビブリオキッズ&ベイビーをプロデュースして下さった、造本作家でデザイナーの駒形克己氏は、『Little tree』で「生と死と再生、生命の輪廻」を表現しています。雪の中で「誰にも気づかれない小さな」種が、やがて少しずつ成長していき、葉をつけ、色づき、鳥や人間たちの生命の源となり、季節に応じて循環していくのです⁵⁾。木が立体的というしかけはさて置き、全ページにわたり異なる紙質が使われていて、読み手の触角をも刺激して生命力を強く訴えてくるのです。注目点は、別の視覚表現がほどこされていて、ページを開くと立ち上がる木に、電光なり自然光が当たると影ができるしかけになっているのです。細部の細部から生命の営みを感じとることができる作品です。

テキスト先行の円環構造は成立するのか

イエラ・マリ氏らが表現したような、絵だけで円環構造を描いた物語と逆の手法、つまり言葉を重視した同構造の絵本もあります。人差し指が指している先にある小さな黒い点が、一瞬、汚れかと勘違いしてしまいそうな表紙絵の『これはのみのびこ』は、1979年に日本の誇れる詩人谷川俊太郎氏が紡ぎ出した絵本です。

見開き第一画面の真っ白な左ページの上詰めに一行「これは のみの びこ」、右ページには一匹のノミが跳ねています。見開き第二画面左ページは、やはり半分以上の余白を残して上部に二行「これは のみの びこの / すんでいる ねこの ごえもん」、右ページはノミの絵に猫が加わります。読者の皆さんは、次が気になるでしょうから、第三画面まで引用しま



『これはのみのびこ』
谷川俊太郎 文
和田誠 絵(サンリード)



すと、「これは のみの ぴこの / すんでいる ねこの
ごえもの / しっぽ ふんずけた あきらくん」と続
きます⁶⁾。ページを繰るごとに節が増加していき、
最終画面で45節に及ぶ長い一文が完成するのです。

積み上げうた『これはのみのぴこ』

このように同じ言葉を繰り返しながら、新しい言
葉が積み重なっていく手法を「積み上げうた」と言
い、谷川氏は『マザーグース』の「ジャックのたてた
家」を真似てつくったと述べています⁷⁾。何しろ谷
川氏は、マザーグースの研究者で、訳者でもあるの
で、翻訳作業によってアイデアがひらめくことも
多々あるでしょう。全画面にわたり、左ページは文
字のみで、右ページに絵のみが描かれていて、言葉
だけの絵本ではありません。絵は、谷川氏の信頼す
る和田誠氏によってユーモラスに描かれています
が、この絵本はテキスト先行で、後にイラストをお
願いしたと話しています⁷⁾。

この「のみのぴこ」の登場から始まる物語は、15
シーンで15通りの登場人物が加わっていきま
すが、最終画面で登場するのは最初と同じノミとい
うところに円環構造を確認できるのです。第三画面で子
どものあきらくんが登場するひとつの円の物語につ
いて、「構造面で子どもの読者への配慮がなされてい
て、ノミという小さな生き物から始まって、徐々に
子どもの身の回りを離れていき、最後はまた小さな
ところへ戻っていくという円環構造を導入したこと
で、積み上げうたの弱点である脈絡なく広がり続け
る解放性ゆえの不安定さを克服することに成功して
いる」と水間氏は分析しています⁸⁾。生きとし生け
るものの「生命の循環」を言葉で表現した円環運動
体の絵本です。

この偉大な詩人は、2016年に新しい積み上げうた
絵本を世に送り出したのです。タグを組んだの
は、新進気鋭の若手絵本作家 tupera tupera の絵に
よる『これはすいへいせん』です。新刊本を開かずと

も、タイトルと作者をみただけで、書店でにんまり
してしまうのも無理ありません。さて、谷川氏が
1977年に出版したオノマトペ絵本の先駆けを見ると、
『もこもこもこ』⁹⁾と円環運動をしているではあ
りませんか。

絵本に学ぶ「理解する」とは

絵本の視覚表現の中で、「特に表現構造は、時空
間を作者がどう解釈しているか、また登場人物の内
面や世界をどう理解しているかなどを、もっとも明
瞭に表現できるもの」と中川氏はまとめ、「描かれた
絵の分析のみで語られることが多いが、構造を理解
することにより、作者のコンセプトを引き出せる力
がまるで変わり、絵本理解が格段に進む」と述べて
います¹⁾。今後の絵本解題や研究の指南としていき
たいものです。

そして、この考え方はすべての世界に置き換える
ことができると思います。法人や企業などの団体組
織においても、この視点を持つようにしたいもので
す。会社組織もそうですが、患者理解においても、
家族構造や個人の内面構造を、視点を変えながらク
ローズアップすることで、患者様の力の引き出し方
にまた、新しい方策がみえてくるのではないでしょ
うか。

文献

- 1) 中川素子：絵本の表現構造 (In 絵本の事典), 朝倉書店, 東京, 2011, pp. 370-381.
- 2) 中川素子：四季の移りかわりをみつけた『木のうた』(In 絵本をひらく), 人文書院, 東京, 2006, pp. 183-188.
- 3) タイガー立石：とらのゆめ, ビリケン出版, 東京, 2008.
- 4) 財団法人 大阪国際児童文学館：子どもの本100選「ねずみくんのチョコッキ」, HP <http://www.iiclo.or.jp>
- 5) 駒形克己：Little tree, ONE STROKE, 東京, 2008.
- 6) 谷川俊太郎 作, 和田誠 絵：これはのみのぴこ, サンリード, 京都, 2003.
- 7) 谷川俊太郎：ことばと絵(講演), 絵本学会 NEWS, No.40, p.3-4, 2010.
- 8) 水間千恵：子どもの言葉を育む教材としての積み上げうた絵本の可能性, 川口短期大学紀要, 30, p.171-180, 2016.
- 9) 谷川俊太郎 作, 元永定正 絵：もこもこもこ, 文研出版, 東京, 1977.

